

がん治療における口腔ケア

吉田 和也[†]

吉川 博政*

第72回国立病院総合医学会
(2019年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 7 (322-324) 2020

要旨

がん治療にともない、さまざまな口腔内の有害事象が発症する。2012年に周術期口腔ケアが保険導入され、がん治療の一環としてその重要性が医療従事者に次第に認知されてきている。本シンポジウムではがん治療における周術期、化学療法あるいは放射線治療中、終末期の口腔ケアに関して、医師、歯科医師、看護師の多職種の立場から概要についての講演があった。

がん周術期患者における口腔管理介入効果、多職種連携（医師、歯科医師、薬剤師、管理栄養士、言語聴覚士）での摂食・嚥下スクリーニング、看護師の立場からのがん治療中の患者の全身、口腔内のアセスメント、アプローチに向けての計画立案、実践、緩和ケア病棟での終末期患者への口腔ケアについてお話があった。

本シンポジウムにおいてがん治療における多職種による口腔ケアの重要性が再認識された。今後、口腔ケアをさらに充実して継続するとともに、実際の臨床に応用できるエビデンスのあるデータを出していくことが期待される。

キーワード 口腔ケア、がん治療、多職種連携

はじめに

口腔は咀嚼、嚥下、構音、発音など重要な機能を担っており、それらの機能が低下することによってQuality of Life (QOL) が低下することは口腔領域を専門とする歯科医師、歯科衛生士にとっては周知の事実である。がんに対する放射線治療や化学療法にともなって、急性期、慢性期あるいは晩発性（終了後、数カ月以降に）口腔粘膜炎、口腔乾燥、味覚異常、歯周病の悪化にともなう感染症、顎骨壊死などさまざまな口腔内有害事象が生じ、口腔の適切な管理が必須である。口腔ケアは口腔の疾病予防、健

康保持・増進、リハビリテーションにより患者のQOLの向上のため、診断、口腔清掃、歯石除去、義歯の手入れ、咀嚼・摂食・嚥下のリハビリテーション、歯肉・頬部のマッサージ、口腔乾燥予防などを行うことである。口腔ケアが誤嚥性肺炎の予防に重要な医療行為であることが歯科以外の医療従事者にも広く浸透するようになった。さらに、2012年には医科歯科連携に基づくがん患者周術期口腔管理に保険が導入され、2014、2016年には口腔管理点数の増額、医科での歯科連携、手術加算が認められた。周術期およびがん治療の一環としての口腔ケアの重要性が医師や看護師にも認識されるようになり、総合

国立病院機構京都医療センター 歯科口腔外科、*国立病院機構九州医療センター 歯科口腔外科 †医師

著者連絡先：吉田和也 国立病院機構京都医療センター 歯科口腔外科

〒612-8555 京都市伏見区深草向畑町1-1

e-mail: yoshida.kazuya.ut@mail.hosp.go.jp

(2019年2月19日受付, 2019年9月13日受理)

Oral Care in Cancer Treatment

Kazuya Yoshida, Hiromasa Yoshikawa*, NHO Kyoto Medical Center, *NHO Kyushu Medical Center

(Received Feb. 19, 2019, Accepted Sep. 13, 2019)

Key Words: oral care, cancer treatment, multidisciplinary team approach